

## 若松林治さんを偲ぶ

黒田洋一郎

世界7大陸最高峰の一つでオセアニア・ニューギニア島の名山、ジャヤ山(カルステンツ峰、5039m)を、加戸俊広さんとともに訪れる計画をしたことのある山友・若松林治さんが亡くなられた。

彼がジャカルタ滞在中の4年余りに書かれた『インドネシアの山登り』(のんびる舎、1997年)は、日本語ではアルプスやヒマラヤがほとんどだった当時、現地情報による本では、詳しいこと、内容の幅が広いことでも異色だった。『多雨林と火山』(古今書院、1997年)という著書を持ち、インドネシアの自然に詳しい児玉茂氏が、「ジャワには3000m以上の山が12峰あり、全てが火山で、しかもそれぞれに個性的な美しさを持つ



若松林治(わかまつ・りんじ)

会員番号12187

1939年9月13日 山形県鶴岡市に生まれる  
1958年 山形県立鶴岡工業高校を卒業。林日野自動車工業に入社、同社山岳部に所属。ビルマ、タイ、インドネシアに駐在、ジャワ島の3000m峰12座全山に登頂  
1996年 日本山岳会入会。紹介者は児玉茂、水野勉  
2004年 同社を定年退職  
2008年 日本三百名山登頂達成  
2022年1月23日 逝去、享年81

っている」と帯で推奨した。

日野自動車の駐在員だった彼は、趣味の山登りに熱中された。ジャカルタ日本人会の機関紙に連載されたためもあり、赴任直後からの諸経験、使用人などインドネシア人との付き合い方にも詳しく、後から滞在した人々の参考になった。また、麓に湧く温泉やエーデルワイス状の花の咲く平原にも触れてあり、旅行案内にもなった。

日本人会には「グヌン会」「グヌン」はインドネシア語で「山」の意という山登りの懇親会があり、この若松さんの本は、今でもバイブルになっているという。すでにインドネシア語で児玉茂・ココ共著『ジャワ登山案内』が出ており、わずかに12ページだが、その日本訳も作られていた。ココさんには、私もジャワの名山巡りや、コモド島などへもガイドしてもらった。

私にとって若松さんは、それまで縁のなかった日本山岳会の集まり、「二火会」を知るきっかけになった人で、後に役立った。若松さんは帰国後、児玉氏の紹介により二火会で「インドネシアの山々」について講演し、その後、私も一緒に二火会に参加するようになった。ある二火会の後の席で、故内田敏子さんと話をしていたら、たまたま「ブラジル最高峰がアマゾンの奥地にあるが、年休だけでは行くのが難しい」と言ったら、内田さんは「あーら、私はネブリナに登りましたよ」と言われ驚いた。彼女の話から、登頂した食虫植物調査隊の隊長・柴田千晶先生と連絡が付き、「私の世界百名山」ネブリナ篇を書くとき助かった。

若松さんは定年後、日本三百名山に挑戦され、79歳で全部登った。山に挑戦され、カムイエクウチカウシ山など山深く、ヒグマに食われる危険もある難しい山などを含み、山登りが好きなだけでは登れない。彼は日野自動車山岳部の部長も務め、現在、地元の高尾山で山のボランティア活動をしている反町良一さんなど、若手山岳部員を育成したのも見逃せない。

会社勤めと山登りを両立させた若松さんは、「なぜ山に登るのか」という問いに「ストレスの溜る日常に対する逃避、気分転換、抵抗、反動?」などの心理を楽しんできた」と答えている。エンジン生産という、合理性が求められる技術業務を長年こなしてきた若松さんらしい。趣味と仕事を両立させた人と言えば、私のもう一つの趣味の蝶では、三菱商事の町村忠良さん(遺稿集『南ブラジルの蝶』(1991年)を出版)を思い出す。「ブラジルの蝶」の研究は49歳の若さで終り、本にはならなかった。

その意味でも若松さんは、海外赴任では『インドネシアの山登り』を出版、定年後は三百名山完登を達成したので、町村さんと比較すれば、趣味の世界では良い人生を送ったと言えるだろう。おふたりとも明朗で、人付き合いが良く、好奇心が旺盛だったことは共通で、惜しい方々を亡くした。

若松さんとは結局、ジャヤ山には当時、現地情勢が悪くて行けなかったが、ジャヤ山は「私の世界百名山」候補に入れてあるので、いずれ行つて眺めるようにしたい。彼の写真とともに。

合掌